

臨外と漱石

※吉田精一著作

鷗外と漱石

* 吉田精一著作集 4

桜楓社

吉田精一著作集 第四卷

鷗外・漱石

昭和五十六年三月二日 第一刷発行

定価 二八〇〇円

著者 吉田 精一

発行者 及川 篤二

発行所 (株) 桜楓社

東京都千代田区猿樂町二一八―二三

電話東京 03 二九五―八七七―(代表)

振替東京六一八〇二〇郵便番号一〇一

© 吉田精一 一九八〇年

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替え致します。

吉田精一著作集 第四卷 目次

I 森鷗外

一 森鷗外……………9

1 社会に出るまで 9

2 ドイツ留学 15

3 文壇活動の開始 20

4 文壇遊離時代 31

5 文壇再活躍時代 42

6 歴史小説から史伝へ 51

7 晩年と死 58

二 鷗外と啄木……………66

三 森鷗外は「体制イデオログ」か……………82

四 森鷗外・人と作品……………86

1 小説 86

- (1) 初期三部作・「半日」「キタ・セクスアリス」ほか 86
(2) 「青年」「妄想」「灰燼」ほか 94

Ⅱ 夏目漱石

一 漱石と自然主義……………157

二 漱石の思想と文学——鷗外と比較しつつ……………174

三 漱石における東洋と西洋……………184

四 作品論……………195

1 「三四郎」……………195

(3) 「雁」・歴史小説・戯曲ほか……………103

2 史伝……………111

(1) 「淡江抽斎」「相原品」ほか……………111

(2) 「伊沢蘭軒」……………119

(3) 「北条霞亭」「霞亭生涯の末一年」……………128

3 評論・随筆・日記・詩歌……………136

(1) 「棚草紙の本領を論ず」「独逸日記」ほか……………136

4 翻訳……………144

(1) 「於母影」「埋木」「即興詩人」……………144

五 夏目漱石・人と作品……………242

1 小説・随筆

- (1) 「吾輩は猫である」「倫敦塔」ほか 242
- (2) 「坊っちゃん」「草枕」ほか 242
- (3) 「虞美人草」「坑夫」 251
- (4) 「三四郎」「それから」 259
- (5) 「門」「彼岸過迄」 267
- (6) 「行人」「満韓とところどころ」「思ひ出す事など」 275
- (7) 「心」「道草」 288
- (8) 「明暗」 295

2 「それから」 209

- (1) 「それから」について 209
- (2) 主人公について 211
- (3) 「それから」の思想 216

3 漱石文学における「それから」 221

3 「門」 225

- (1) 「門」の成立 225
- (2) 「門」の みどころ 229
- (3) 大人の文学として「門」 238

2 その他

304

(1) 随筆・評論・初期の文章

304

(2) 講演・序文・雑篇

314

六 夏目漱石拾遺……………

324

1 『漱石全集』の流行——なぜそれは読まれるか——

324

2 生誕百年の四文豪——紅葉・露伴・子規・漱石——

327

3 文豪と子ども達

330

Ⅲ 鷗外と漱石

一 漱石と鷗外——「三四郎」と「青年」を中心にして……………

335

二 鷗外と漱石——人としての比較……………

344

1 鷗外の友人に対する態度

345

2 漱石の友人、門下生に対する態度

347

3 鷗外と漱石の出身と環境

350

4 鷗外と漱石における洋行の意味

352

5 夫としての鷗外

357

*

第四卷 鷗外・漱石
解説 小泉浩一郎
あとがき
367

I
森
鷗
外

一 森 鷗外

1 社会に出るまで

石見国（島根県）津和野町を私が訪れたのは、昭和四十年の秋である。福岡、下関、松江などは何回か訪れながら、津和野にまではつい足を伸ばす機会がなかった。それほど今は交通の不便な、年々人口の減少する僻陬へんそくの小都会になっている。

しかし町そのものの開発の及ばぬ有難さには、鷗外の生家、森家の親戚しんきでまた先輩にあたる西周さいしゅうの生家などが、当年のおもかげを残している。山間の盆地にあるこの小都市には、時の流れもゆるやかなのか、北にそびえる青野山は大和絵にあるような翠黛すいたいを横たえて変らない。町を貫流する津和野川の水は清く、無数の鯉こいが放し飼いになって、銀鱗ぎんりんをおどらせている。

しかし自然は変わらずとも、町自体の意義は変った。鷗外の生まれた時分の津和野は、今日の津和野とはちがいが、山陽山陰をむすぶ交通の要地であり、亀井家四万三千石の城下町であった。毛利藩に隣ったこの小藩では、力を以て大藩に対抗することが不可能であるところから、文化の面を充実していちはやく新しい時代の要求に応えようとした。藩校養老館を中心に、儒学以外、国学、数学、蘭学などがこの小都会に採り入れ

られた。鷗外の父静男も長崎に出てオランダ医学を修めている。幕藩体制のもとでは、自然環境以上に政治的環境が地方の人材を養成する。津和野が小藩ながら、国学者に大國隆正、福羽美静等、洋学に小藤文次郎、山辺丈夫、八杉利雄等を出し、さらに西周、鷗外などを産んだのは、進歩的な藩政のたまものである。十一代の藩主亀井茲監は、標準語などの普及にも熱心で、つとめて中央の文化的雰囲氣に接触しようとしたという。

鷗外森林太郎は、このような環境に少年時代を過した。彼は文久二年（一八六二）一月十九日（新曆二月一日）、津和野町田村横堀に、五十石を食む典医森静男の長男として生まれた。父の職をついで医者となることは生誕した時からの約束であった。封建時代の長子の責任は重く、森一家の興廃の責任は、彼の双肩にかかっていた。彼は神童とよばれる拔群の素質に加えて無類の勉強家であった。やや長じて際会したのは腕一本で「立身出世」をモットーとする、近代日本の萌芽期である。彼の人生行路はいやおうなく決定していたといつてよい。

少年時代、当時の士族の教養として漢籍を学んだ彼は、一方ではオランダ文典の手ほどきをうけた。父にともなわれて明治五年上京してからは、医学修業の前提として進文学舎でドイツ語を学び、東京医学校（のちの東京大学医学部）に入った。明治九年からは寄宿舎に起居し、十三年には寄宿舎を出て、本郷竜岡町の下宿屋上条に転じた。のちの彼の小説「雁」にも出て来る、あの「上条」である。十四年七月東京大学医学部を終えた。年齢は満二十歳に満たず、もちろん全卒業生中の最年少であった。

学問として医学を修めるには、どうしても本場のドイツに洋行することが必要であった。鷗外はそれを志望したが、卒業成績が彼の素質に比してよくなかったので、留学生たろうとの希望は達せられない。個人の

力での外国留学は不可能である。この事情が、鷗外に軍医の道をえらばせた一つの要因であったと、私は考へている（長谷川泉「森鷗外論考」も洋行の目的を重く見ている）。

軍医になる連中はあらかじめ陸軍の委託学生となっており、鷗外の同級には、小池正直、賀古鶴所、江口襄、谷口謙等がいた。鷗外は官費生ではあったが、陸軍の給費生ではなく、もともとは軍に入るつもりはなかった。大学を卒えて自宅で開業している父を助けていた鷗外を、軍に推薦したのは小池正直であった。六歳ほど年上の小池は、のちに鷗外と阻隔したものの、学生時代は親友であり、軍医総監の石黒忠恵にあて、この「千里の才」を民間に置くのは惜しいとたのんでいる。小池によれば、鷗外の卒業成績が抜群でないのは、彼が性格的に外人教師と合わなかったためである。鷗外の長所は、西洋医学に盲従（まっただ）しないで、自分のところを屈しないところにある。そのため、洋人教師から忌憚（きたん）されたのだという。推薦文の一部をひくと次のようである（もとは漢文、今便宜のために大意をとることにする）。

森氏は人となり敏で学を好み、博覧強記である。常に西医の陸梁（くりりやう）するを憂い、西洋と日本とは氣候風俗、服裝食物もちがう、医学も亦安んじて盲信すべきでない。しかし学問の上では向うが先輩で、經驗を積んでいるから、しばらくこれを学び、他日の資とするのみだ、といっている。その志は高遠で、西洋心酔者とはちがう。彼は本課を学ぶかたわら、兼て和歌詩文を学んで至るところがあり、中国の医書もさぐって、他日世に益しようとしている。洋学生には、洋書をよく読む者はあるが、自国の学に暗く、また心を守る所がない。洋人の口から出た言は、瓦と玉とをえらばず、尊重し、何でもかまわず施そうとする。ひとり森氏は屹然（きつぜん）として、その間に立って、その弊に染まない。（略）

これを見ると、鷗外が文明開化の先端を行く洋学生時代に、すでに東西両洋に足をかけた〈二本足〉の学者であり、のちに〈洋行帰りの保守主義者〉の〈元祖〉となった資格を、そなえていたということがわかる。この小池の推薦状が物をいって、彼は明治十四年十二月陸軍軍医副（中尉相当官）に任じられ、ここに生涯の生活方向を決定した。

しかし鷗外が軍医として理想的な存在であったかどうかは疑わしい。軍医の草分けとしての石黒忠恵は、

……勤めもし、病家もち、九時から三時迄は役所で勤め、九時前三時後は病家を稼ぐといふやうにては勤務か病家か何れにか不充分の事が出来る。勤務に欠ければ陛下に済まぬ、病家に欠けては病家に済まぬゆゑ、一方即ち勤務を専らにしても、とても豪傑方の半分にも足りないとの極々ごく小さな考へより病家はいくら頼まれても皆他の専門家へ紹介して一人も取らぬより、遂には石黒はあれでも医師とまで世俗に唱へらるゝも其くせ医学は存外新しき事まで調べて居るよ、軍医といへば石黒、石黒といへば軍医と小児車夫までに唱へられるに至つた。

（況翁叢話）

というような、模範的な軍医としての生活に鷗外は徹することができなかった。石黒にとっては、軍医はほこるべき人間の栄職であらう。しかし鷗外は、ここにひいた石黒文の〈病家〉を「文学」におきかえた場合、石黒とちがって、両者に仕える生活をあえてした。彼の生計のみなもと、社会人としての位置は軍医としてであったが、内面的要求をみたすものは、石黒のように、軍医以外の何ものでもない場合と、はっきり選をことにしていた。彼の友人で、一足先に医務局長になった小池が鷗外を目して、〈文学に深入をしすぎ、

軍務に不真面目なりとの考へをもつて居た（『男爵小池正直伝』一〇八〇ページ）のもあるいは当然だろう。しばしば部内の上長官からも「仙人」とよばれるほどの、細事に超越的な存在であったことは、山田弘倫の「軍医としての鷗外先生」が語る如くである。

ともかく軍医として世に出た鷗外は、洋行に対して熱心であり、明治十六年三月には、ヨオロッパへ派遣される東京陸軍病院院長橋本綱常を尋ね、留学の希望をのべ、随行を志願したがきかれなかった。しかし幸いにして翌年六月、陸軍省から衛生制度調査及び軍隊衛生学研究のためドイツへ官費留学を命ぜられた。彼の喜びは察するにあまりある。彼の「自紀材料」を見ると、この年七月二十八日の項に、（聖上に拝謁し、賢所に参拝す）とある。これが当時の陸軍省留学生の果すべき義務だったのであらう。

鷗外と夏目漱石とは近代の二文豪として併称されるが、鷗外のドイツ留学と、漱石のイギリス留学との内容はずいぶんの相違がある。漱石は鷗外におくれること十六年、教え年三十四歳で文部省留学生として日本を立つが、別に（聖上に拝謁し、賢所に参拝す）ということとはなかったし、鷗外のように洋行のための売りこみ運動もしておらず、却って自分は不適任だといって一度は辞退さえしている。たといその辞退が外交辞令上のものだったとしても、とにかくとびついて是が非でも行きたいというほどの、強い志望でなかったことはたしかである。

それはともかくとして、鷗外と漱石とは、皇室に関する関係の上で相当にへだたりがある。鷗外は軍人として、大元帥たる天皇の指揮下に属し、皇室の運命は彼の運命と直接間接につながりをもつ。彼の帯びた位記勲等も、心地のわるい修飾物ではなかったであらう。たとい明敏な彼の脳裏に天皇制の不条理がうつっていたとしても、——「かのやうに」以下の五条秀麿ものにはその意味での鷗外の苦悩が反映している——

彼には皇室は擁護すべき存在だったことは疑いをいれない。

漱石はちがう。彼もまた文部公務員として高等官何等かに叙せられた経験はあるが、大体が野の人であった。東京帝大の文科大学での講義「文学評論」の中ですら、

彼（スキフト）はいやに政治的である。貴族的である。勿論彼自身が政治家であつて、政治に最も多く興味を有する所から、自づと政治に関する諷刺が多くなる訳ではあらうけれども、吾々から見ると余りに其の傾向が著し過ぎる様に思はれる。彼は小人国へ行つても大人国へ渡つても直ぐ國王が如何だとか、皇帝が奈何したとか云つて居る。やれ宮殿が如何の、大臣が奈何したのと、そんな詮索ばかり氣にして居る。吾々帝王にも又貴族や金持にも余り興味を有しない者からいふと、今少し平民的に社会的方面から筆を執つて貰ひたい様な心持がする。

（第四編）

と云っている。もうひとつ、これはプライベートな日記の中ではあるが、能を見に行つたおりの記録に、へ皇后陛下皇太子殿下喫煙せらる。而して我等は禁煙也。是は陛下殿下の方で我等臣民に対して遠慮ありて然るべし。若し自身喫煙を差支なしと思はゞ臣民にも同等の自由を許さるべし。何人か煙草を煙管に詰めて奉つたり、火を着けて差上げるは見てゐても片腹痛き事なり。死人か片輪にあらざればこんな事を人に頼むものあるべからず。煙草に火をつけ、煙管に詰める事が健康の人に取つてどれ程の勞力なりや。かゝる愚なる事に人を使ふ所を臣民の見てゐる前で憚らずせらるゝは見苦しき事なり（傍点稿者、明治四五年六月一〇日記）とはばかり書きつけている。これは鷗外には書けない。宮中の賜祭（しきん）に召されて、献立を丹念（たんねん）に日記